

## 42) 松果体部に発生した転移性脳腫瘍の一例

深瀬 栄一・佐藤 清 (山形大学) (脳神経外科)  
 山田 潔・中井 昂 (米沢三友堂病院) (脳神経外科)  
 川上 千之 (脳神経外科)

成人の松果体部腫瘍は稀であり、同部への癌転移例は非常に少ない。今回、肺癌の松果体転移例を経験したので報告する。

症例：64才男性。意識障害で発症し、CT で造影される松果体部腫瘍と閉塞性水頭症を認め、脳血管写では腫瘍陰影は認めなかった。V-P シャント後、Parinaud 徴候・Argyll-Robertson 瞳孔などを認めた。一方、胸部レ線で右上肺野に腫瘍陰影を認めた。松果体部腫瘍摘出術と肺腫瘍生検を行なったところ、それらの組織像は腺癌で同一のものであった。転移性脳腫瘍の診断で全脳照射を行なったが、その後、左後頭葉にも腫瘍が出現し、全身状態悪化の為死亡した。剖検では、原発性肺癌と脳・肝・副腎・骨への血行性と思われる転移を認めた。

## 43) 照射療法中に石灰化を来した小児鞍上部胚芽腫の1例

木村 明・石黒 修三 (石川県立中央病) (脳神経外科)  
 宗本 滋・正印 克夫 (院 脳神経外科)  
 二見 一也

照射療法中に、CT で腫瘍内石灰化を認めた小児鞍上部胚芽腫の1例を経験した。

症例は7才女児。尿崩症で初発し、2ヶ月後に視力低下、両耳側半盲となった。放射線学的に、トルコ鞍拡大、腫瘍の鞍上進展による水頭症の合併を認め、髄液細胞診で胚芽腫が疑われた。内分泌検査では PRL, LH の軽度高値、下垂体前葉機能低下を認め、腫瘍マーカーは陰性であった。ライナック 1000 ラッドの CT で腫瘍の縮小と斑状石灰化を認め、1400 ラッドで塊状石灰化となった。腫瘍はその後消失し、視力視野、PRL, LH は正常化した。従来、胚芽腫自体の石灰化の報告はなく、本例の石灰化は照射により腫瘍血管網に生じた石灰沈着と考えられた。

## 44) Astrocytoma Gr. II に対する放射線

照射後 中大脳動脈閉塞をきたした1例

伊東 民雄・鎌田 一 (中村記念病院) (脳外科)  
 堀田 隆史・荒 清次 (院 脳外科)  
 島田 孝・川合 裕 (院 脳外科)  
 中村 順一

脳腫瘍に対しては、手術療法、放射線療法、化学療法の三者による combination therapy が現在広く施行されている。その中で放射線照射による小血管病変、即ち

fibrinoid necrosis hyalinization を主病変とする血管性病変が広く知られている。しかし、放射線照射による大血管病変の報告は稀である。今回我々は、post-irradiation MCA (M<sub>1</sub>) occlusion の症例を経験したので、文献的考察と合わせて報告する。

<症例> 20才女性。58.4.22 当院入院となった。

右脳腫瘍の診断にて 58.4.28 radicalope 施行。58.5.30 より 58.7.12 まで Synchronized radiochemotherapy (60 Gy/24 F/43 days ACNU, VCR) 施行。経過良好にて 58.7.25 退院するも visual acuity\* の低下で 59.6.6 再入院。入院中 lt. hemiparesis 出現。60.1.14 CAG にて rt. M<sub>2</sub> occlusion を認めた。

## 45) Delayed Radiation Necrosis の2例

井上 明・伊藤 俊二 (山形大学医学部) (脳神経外科)  
 山田 潔忠・中井 昂 (院 脳神経外科)

Delayed radiation necrosis (DRN) の2例を報告した。症例1は42才男性で、左前頭葉の悪性神経膠腫にて、照射 (total 54 Gy) を行った。2年3ヶ月後に右半身の痙攣発作が出現し、CT では通常の enhanced CT (CECT) で殆ど増強されず、delayed high dose enhanced CT (DHDCT) で著明に増強される低吸収域が左頭頂葉に認められた。摘出術を施行し、病理組織学的には DRN であった。症例2は67才の男性で、左上顎癌にて照射 (total 60 Gy) を受け、2年後に頭痛、精神症状が出現し、CT では左側頭葉に CECT で極く軽度不規則に増強され、DHDCT で著明に増強される低吸収域を認めた。生検を施行後、原因不明の免疫能の低下により死亡した。剖検所見では左側頭葉先端部に DRN を認めた。

## 46) 悪性 glioma に対する低線量遠隔照射の試み

片倉 隆一・北原 正和 (東北大学脳研) (脳神経外科)  
 鈴木 二郎

山田 章吾 (東北大学) (放射線科)

既存の放射線療法に抵抗性を示した悪性 glioma に対し、低線量率遠隔照射を試みたので、その治療効果について検討した。対象は初回治療後腫瘍陰影が残存した悪性 glioma 8例と再発 glioma 10例の計18例である。低線量率遠隔照射は、1時間1 Gy, 1日5~7 Gy を2~3日連日照射し、総線量は12~20 Gy とした。

CT 上の治療効果は、初回治療後施行した8例の寛解率は8例中3例 (37.5%)、再発例では10例中8例 (80%)